

# テラコッタ

## ——「土」と「火」の造形——

### 制作現場から

山 成 昭 世  
YAMANARI, Akiyo

テラコッタ (Terra cotta)

粘土で造形した、素焼きの器物、塑像、瓦、建築物の外装に用いる装飾用のタイルなどの総称。美術用語では素焼きの美術作品をさす。身近には素焼きの植木鉢、伏見人形 (民芸人形)、土鈴などがある。

#### I. テラコッタの歴史

可塑性のある土は古代の人々にとっても魅力的な素材であったにちがいない。が、土のままでは半永久的な保存は望めなかった。人類は火を使い火食することを覚えてから、土が偶然にも形をとどめ水に浸しても壊れない土を発見した。土を焼成し塊にしたことは、人類が初めておこなった化学実験であるといわれている。テラコッタは紀元前5000年～6000年ころから造形され、文明が発祥した地にテラコッタも存在し多くの造形物が現存している。現存している紀元前のテラコッタのモチーフは《ヴィーナス》が多く、その女性像は大きな乳房や臀部、性器が誇張されており妊婦の場合が多い。それらの造形物は「護符」として、あるいは人類共通の多産豊稔の祈りを込めた地母神像でもあった。全国各地においてその造形表現に非人間的・超人間的な共通性が認められ興味深いものがある。

日本の歴史→土偶、土器、埴輪

海外の歴史→古代のヴィーナス、イタリア (エトルリア)、アフリカ (イフェの肖像彫刻)、インド、インカ、中国 (兵馬俑)

テラコッタで東西に通じる共通点は副葬品である。日本の土偶や埴輪や土器は次第に生活に深く結びつき茶器などのように洗練された工芸品として発展していく。

海外では次第に副葬品から日常的になり、風俗人形や玩具が人間的な魅力を加えて観賞品となる。

#### II. 制作現場から

彫刻は彫造、塑造、集合彫刻などに分類される。塑造は技法によって土でモデリングした原型を雌型に取り異素材に置き換え再現させる方法、塑造原型をそのまま保持する方法、じか付け法などにおおまかに分けられる。

私は、具象彫刻を塑造により土で完成させ、雌型に取り同じ形状に材質を転換し型を復元する方法で制作してきた。土で原型を完成させる造形法には満足していたが、原型が崩され異素材の石膏・樹脂・ブロンズに置き換え再現されることに常に違和感を抱いていた。作家の造形活動に充実感と満足感を与える造形法と素材を模索していた。

テラコッタ作家の橋本裕臣氏は「彫刻は建築やデザインなどと違い、完成時点まで作者が関わるのを常とする観念が支配的であり、木彫や石彫において作家は最初から最後まで素材と深く関わり中間に他

者の介在をゆるさない。しかし粘土の場合、粘土→石膏→ブロンズ（または金属、樹脂）の過程で型成形に、あたりまえのように易々と何のこだわりもなく他のプロセスを受け入れてしまうことに疑問を感じていた。」このように自分が造形した形を異素材に置き換え再現する方法に疑問を感じ、独自のテラコッタ造形を試みる作家の造形思考は共感するところである。

幼児期の泥遊びや小学低学年の粘土の造形の記憶が絵を描いた記憶より瞬時で断片的ではあるが鮮明に残っている。他者と比較して泥遊びや土遊びの体験が豊富だったということではない。記憶は視覚的でなく心地よく触覚を働かせたもので、積極的に造形活動を受容し満足したものであった。また、中学生時に新聞紙を芯に高さ20cmの座像トルソを制作しガス窯焼成したとき、自分で造形した柔らかい土の作品が焼成されることで、形がありのままに保持されていたことに、今までの造形活動では味わえなかった大きな満足感と感動を覚えた。この体験が始めてのテラコッタとの出会いであった。土という素材に魅せられ、土で造形された形を何物にも素材を置き換えることないテラコッタへと制作方法を転換した。

また、土で完結された形はそれのみでも十分に視覚に訴えると考えられるが、素のままのテラコッタは未完の感が強い。着色を試行錯誤した結果、墨汁溶液に作品を浸す染色的着色法を発見した。

土で完結された置き換ええない造形と染色的着色が制作現場での研究課題となる。

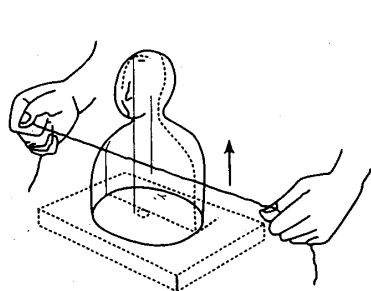
### 1. 異素材に置き換ええない制作方法（研究課題1）

作家にとって素材と造形法はコンセプトと切り離して考える事はできない。

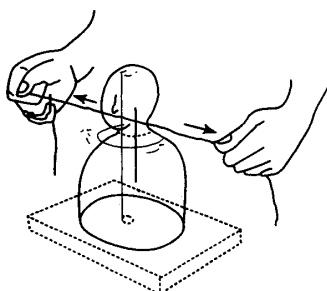
一般的に塑造は粘土で形を完成させ、石膏で雌型を取り石膏、樹脂、ブロンズで置き換えて再現する。ロダンの《考える人》は土の原型をブロンズに置き換え再現した作例である。置き換える造形法では土は単なる中間素材で造形のための手段であり、作家の多くは土に対し比較的無関心で、型取りされると同時に土の原型は壊される。

土の原型が壊されることに違和感を感じ、原型を壊さず、かつ置き換ええない造形法で制作する。技法として完成した形を分割し土の厚さを均一に残し、再び型を接合する方法である。分割する成型法では土の乾燥具合に配慮し土の様子をうかがいながらの制作となる。

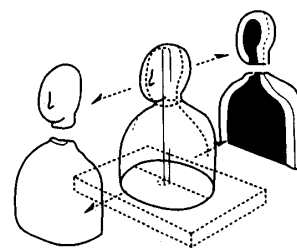
#### 原型の分割方法



①原型を前後に二分割



②首部分を胴体より分割



③型を四分分割し均一な厚さに土を残し、他は取り除く

### 2. 焼成方法

偶然の焼色や効果を狙う焼成方法でなく一定の焼成効果が得られる電気窯での焼成。十分乾燥させた作品を8時間～10時間かけ400℃までの低火度焼成をおこなう。次に850℃まで一晩かけて温度を上昇さ

せる。200℃以下になると作品を窯から出す。

### 3. 染色的着色法（研究課題2）

テラコッタの魅力は素朴な造形と温度感ある土色にあるとよくいわれる。素のままのテラコッタ作品の土の素朴さを認めてはいるが、土の温度感が醸し出された重厚なテラコッタの表現もあると考える。私は、素のままのテラコッタはそれのみでも視覚に訴えると考えていたが、窯から出した瞬間、工業製品のようなレンガ色が強烈で、作品のフォルムが一瞬見えなくなった経験があった。視覚に訴える着色効果を試行錯誤するうちに墨汁水溶液に作品を浸す染色的着色を発見した。そこで、墨の種類や成分が着色効果に与える影響は大きいと考え、植物性カーボン墨、鉱物性カーボン墨、市販の墨汁で着色の試験を試すこととなった。

ストピースで実験を行った結果、鉱物性カーボン墨は硬質で無機質な墨色で、植物性カーボン墨と市販の墨汁は茶色を感じさせる温度感のある墨色が得られた。

墨を使った染色的着色を発見したことで、体温感を内包した重厚な土色のテラコッタ表現が可能となった。

### III. おわりに

終始一貫して土と関わり制作したい。その思いはテラコッタによって実現し、土への愛着を一層深め土と向き合う制作を真剣に自分に問うようになった。

テラコッタの「土」は「火」によって永遠に変化することない完結された形となって誕生する。終始一貫した制作はコンセプトと切り離して考えることはできないが、作家の手から離れ他者に委ねる焼成の工程は避ける事はできない。太古の人々は火食を覚えてから土を永遠に保持することを偶然にも発見し、人智の及ばない火の力によって永遠の形を手に入れた。焼成によって生じる土の歪み、ひずみ、割れ、ひびは、作家の「つくらざる形」として受容することにためらいはない。

人間は燃焼し生じる媒を手に入れ墨を作った。土と火で完結された形に、火を媒介として生じたカーボンを着色料に使用したことに神秘的な出会いを深く思った。

今後の研究課題として、人体の等身像や全身の置き換ええない制作法を研究実践し、着色料を多様性を制作の場で試み作品に反映したいと考える。